詳註近世文學選

次田潤 著

明治書院

次田潤著

詳註

近世文學選

明治書院刊

著者略歷

明治十七年四月二十六日岡山市に生る。
明治四十二年東京帝國大學國文學科卒業。
神宮皇學館教授、第七高等學校教授、佐賀高等學校教授、學習院教授兼日本女子大學教授、第一高等學校教授兼東京文理科大學講師等を經て、現在、立正大學文學部教授・日本學術會議第一部會員。

主要著書

萬葉集新講、古事記新講、祝詞新講、國文學史新講（上卷下卷）日本文學通史、上代和歌（日本文學大系の一册）詳註伊勢物語　詳註方丈記發心集、詳註近世文學選。

昭和二十八年九月十五日　印刷
昭和二十八年九月二十日　發行

詳註近世文學選

定價　金百參拾圓

著者　東京都中野區鷺宮一丁目三十八番地　次田潤

發行者　東京都千代田區神田錦町一丁目十六番地　株式會社明治書院　專務取締役　文入宗義

印刷者　東京都新宿區山吹町一九八番地　東和印刷株式會社　代表者有馬彌市

發行所　東京都千代田區神田錦町一丁目　株式會社明治書院
振替口座東京四九九一番　電話神田（25）一〇三五四番　一五七三〇番

明治書院　發行之印

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

はしがき

一、本書は大學や高等學校などにおける近世文學講讀演習の教科書又は參考書とする目標のもとに、西鶴・芭蕉・近松の三大家の代表作品を中心とし、その後にあらはれた作者の名品を加へて、近世文學の精彩を一書に收めたものである。

一、これまでの近世文學の分類の仕方には、かなり不合理なところがあると考へられるので、本書においては、近代文學との關連性を考慮して、小說・紀行・隨筆・連句及び俳詩・淨瑠璃劇の五部にわけることにした。したがつて、これまで俳文と呼ばれたものは、紀行か隨筆かいづれかの中に入れ、また和詩雜體などと稱せられたものは、近代の自由詩の先驅的なものと考へられるから、これを假りに俳詩と名づけて、連句と並べて收めることにした。

一、小說の部においては、西鶴の浮世草子のほかに、なほ採るべき各種の作品があり、また和歌や隨筆の方面にも、加へたいものが多く殘されてゐる。しかし、本書は現代人の知性と感性によつて高く評價されうるものを選びとる方針をとつたから、第二次的な前記の諸作品はしばらく割愛した。

一、本書に收めた作品の中、自筆刻本又は傳來の正しい版本の存するものは、その本文により、それ以外のものは、信賴のおける善本によることにした。本文の校訂に當つては、妥當でない文字を現

代の通行文字に改め、文法・送假名・假名遣などを補正し、なほ適當に句讀點を加へて、讀みやすくした。

一、原本に挿繪のある場合には、その代表的なものを縮寫して掲げたが、なほ作家の肖像・筆蹟をはじめとして、本文中に出てゐる人物・名所・古跡・服飾・器物・動物・植物・建造物などの圖版およそ五十箇を挿入して、作品の理解と鑑賞の便宜をはかつた。殊に「奥の細道」は蕪村の筆になつた繪卷や屏風繪があるほどであるから、比較的多くの圖版を加へておいた。

一、作品の配列には、いささか心遣ひをしたつもりである。例へば第三部に「旅賦」と「兩國橋」を收めたのは、第五部の「丹波與作待夜の小室節」における背景がそれに描寫されてゐるからである。又第三部の「幻住庵記」と「芭蕉堂再興記」との間には親密なつながりがある。また「春の月」のあとに蕪村俳句抄錄を添へ、「蚤のあと」の終に、幼兒にそそぐ切實な親心を示した八句を掲げたが、これはそれぞれ前文の延長として、また作者の個性の一端を知るための資料となると思つたからである。

一、學習者が單獨で、または共同で文藝作品を研究するときには、圖書室にとぢ籠つて、各種の辭書や註釋書や研究論文はもとより、作品の背景となつてゐる廣い範圍にわたる和漢の古典との關係を調査しなければならない。これは極めて肝要な修業にちがひないが、檢索の煩はしさは、文藝その

ものに對する鑑賞や批判を行ふための意慾を減退させるおそれが無いとは言へない。そこで本文の頭註には特殊な語句の解釋・出典はもちろん、人名・地名・遺跡・社寺・動植物・服裝・模樣・器具・社會制度・年中行事などについて簡明に解說し、又しばしば關係文獻を揭げて、檢索の勞を輕減するやうにした。故事出典は原文の要所をそのまま引いたが、傳記傳說その他長文にわたるものはその梗概を記しておいた。

一、本書の頭註は、先學の註釋書や研究論文などを參酌して、最も妥當とおもはれる說に從つたが、異見のある場合や、從來まだ註解されてゐない作品に對しては、私見を稍詳しく述べておいた。先學の說を引用するときには、一々據りどころを明記すべきであるが、限られた紙面の都合上、しばしば省略したことを謝しておく。

一、私が大學生であつた頃、近世文學の知識を授けられたのは、藤岡作太郎・關根正直・佐々政一の三先生からであつたが、同じ頃に夏目漱石・上田柳村・藤代素人の三先生が、西歐十八世紀の小說・詩・隨筆・劇の講義をされてゐたのを拜聽した。本書を起草するに當つて、四十二三年前にうけた前記諸先生の學恩を、まことになつかしく且つありがたく回想したしだいである。

昭和二十八年七月二十四日　　著者

目次

第一部　小説

大晦日はあはぬ算用……西鶴……一
忍び扇の長歌……同……六
後家になりぞこなひ……同……一〇
世界の借屋大將……同……一八
長刀はむかしの鞘……同……二四
平太郎殿……同……三一
人には棒振蟲同然に思はれ……同……三九

第二部　紀行

笈の小文（抄）……芭蕉……四七
奥の細道……同……六二

第三部　隨　筆

幻住庵記……芭蕉……一四
柴門辭……同……二〇
芭蕉堂再興記……蕪村……二三
宇治行……同……二七
春の月……同……二八
鷹丸法師……一茶……二三
天の音樂……同……二四
庭の栗の木……同……二六
蚤のあと……同……二九
露の世……同……二三
旅賦……横井也有……二四
兩國橋……石川雅望……二五

第四部　連句・俳詩

連句

初時雨の巻（猿蓑）……芭蕉・去來・凡兆・史邦……一六四
梅が香の巻（炭俵）……芭蕉・野坡……一六九

俳詩

初秋……支考……一七五
促織……同……一七五
山中尋酒……得巴兮……一七五
茄子……也有……一七六
晋我追悼曲……蕪村……一七六
春風馬堤曲……同……一七八

第五部　淨瑠璃

丹波與作待夜の小室節（上の巻）……近松門左衛門……一八二

圖版目次

駿河靈書小判金……二
擱　鍋……三
挾　箱……六
予馴れ給はぬ濯ぎ洗濯……八
杜斤の日りんと請取りて……二
長刀は昔の鞘……二六
裸身の肩をすくめて……四四
吉野山、中の千本櫻……五三
鑑眞大和尚像……五六
須磨の古戰場　その一……六〇
同　　その二……六一
芭蕉肖像……六二
蕪村筆與の細道屏風繪……六四
よちの木……七二
あせび（馬酔木）……七七
多賀城碑原文……七八
鹽竈神社樓門……八〇
雄　島……八一
高館遺跡……八四
金色堂內陣……八五
勢至觀音像……八六
べにばな……八八
立石寺の胎內潛……八九
月山頂上……九二
雨の象潟……九五
ねぶの花……九六
みさご……九七
芭蕉の眞蹟……一〇〇
兜……一〇一
金色堂……一一〇
清衡奉納の紺紙金銀泥寫經……一一一
いるか……一一三
國分山全景……一一五
幻住庵跡……一一七
金福寺山門……一二三
金福寺境內の蕪村の墓……一二五
蕪村筆自畫自贊……一二九
一茶の挿繪……一三四・一三五
廣重畫東海道五十三次の赤坂……一四五
あんかう……一四八
江戸の古圖……一五二
やまあらし……一五三
むささび……一五三
牛　膅……一六〇
のうぜんかづら……一七五
巢林子近松翁（木彫）……一八三
鶴　菱……一八四
三重たすき……一八四
窠に寢……一八四
廣重畫東海道五十三次雨の土山……二〇〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

詳註近世文學選

第一部　小說

大晦日はあはぬ算用

西鶴

(一)山に自生する常綠喬木カヤの實。ナツメ形の實で長さ一寸弱。油を採つたり、炒つて食用に供するが、かち栗と共に正月の祝儀にも用ひる。

(二)栗の實の殼と澁皮とを臼で搗ち去るから、かち栗と呼ばれる。音が勝と相通ずるところから祝儀に用ひられる。

(三)門や神棚などに立てる松。一般に飾り物のやうに思はれてゐるが、もとは歲神の依代(よりしろ)であつた。

(四)齒朶。裏白ともいふ。これを標繩(しめなは)に挿んで神棚を飾るのは、もと神の占有する淸淨な場所であることを示すためであつた。

(五)當時は十二月十三日に行つた。

(六)朱鞘(流行おくれのもの)の刀を拔かうとする身構へをして。

(七)政道の正しい。

(八)浪士。一定の勤をもつてゐない者。失業者。

(九)店又は貸家。借家住ひを店借(たながり)といひ、借家人を店子といふ。

大晦日はあはぬ算用

榧(かや)(一)、かち栗(二)、神の松(三)、山草(四)の賣聲もせはしく、餅つく宿の隣に煤(五)をも拂はず、二十八日まで髭も剃らず、朱鞘(六)の反りをかへして、「春まで待てといふに、是非にまたぬかと、米屋の若い者をにらみつけて、直(すぐ)なる(七)今の世を横に渡る男あり。名は原田內助(ないすけ)と申して、「かくれもなき浪人(八)、廣き江戸にさへ住みかね、この四五年品川の藤茶屋のあたりに店借(たなか)りて(九)、朝(あした)の

薪にことを缺き、夕の油火をも見ず。これは悲しき年の暮に、女房の兄半井清庵と申して、神田の明神の横町に藥師あり、このもとへ無心の狀を遣はしけるに、たびたび迷惑ながら見捨てがたく、金子十兩包みて、上書に貧病の妙藥金用丸、よろづによしとしるして、内儀のかたへおくられける。内助よろこび、日頃別して語る浪人仲間へ、酒ひとつ盛らんと呼びに遣はし、幸ひ雪の夜のおもしろさ、今までは崩れ次第の柴の戸を開けて、さあこれへといふ。以上七人の客いづれも紙子の袖をつらね、時ならぬ一重羽織、どこやら昔を忘れず。常の禮義過ぎてから、亭主罷り出て、私仕合の合力を請けて、おもひままの正月を仕ると申せば、おのおのそれはあやかり物といふ。それにつ

駿河墨書小判金

(一〇)今の千代田區宮本町の神田神社。

(一一)元祿以前の小判金一兩は錢四貫文、銀五十匁替。文祿小判金の面には駿河の二字の墨書がある。この二字は金工後藤光次の自署。駿河小判のほかに武藏小判があつた。

(一二)藥の包紙に書く文句を眞似た洒落である。

(一三)人の妻（又は妾）をいふ。内證の方ともいふ。

(一四)特に親しく交際してゐること。

(一五)年の暮だから一杯飲まう。今の忘年會である。

(一六)合計七人。

(一七)厚手の紙に柿澁を幾度も塗り、よく乾かし、夜露にさらして澁の臭みを去り、よく揉んでやはらげたのを仕立てた衣類。暖かであり安價でもあるから、貧しい人に愛用せられた。

(一八)物質上の援助。ここでは金錢を惠んでもらつたこと。

(一九)しあはせ者。果報者。轉じて、幸を得た人に似て、自分もその幸福にあづかること。

(二〇)一つの趣向。一工夫。
(二一)口輕く、語呂が面白くて、滑稽味のあること。
(二二)謠曲高砂の「千秋樂には民を撫で、萬歳樂には命を延ぶ……」の句などを謠つてめでたく酒宴を閉ぢること。
(二三)酒の燗をするときに用ひる取手のある鍋。
(二四)手から手へ送つて、取りかたづける。

き上書に一作ありと件の小判を出せば、「さても輕口なる御事と見てまはせば盃も數重なりて、よい年忘れ、ことに長座と、千秋樂をうたひ出し、燗鍋鹽辛壺を手ぐりにしてあげさせ、小判も先づ御仕舞ひ候へと集むるに、十兩ありし内一兩足らず。座中居直り袖などふるひ、前後を見れども、いよいよ無いに極りける。あるじの申すは、「その内一兩はさる方へ拂ひしに、拙者の覺え違へといふ。「只今まで確か十兩見えしに、めいよの事ぞかし」。とかくは銘々の身晴と、上座から帶をとけば、その次も改めける。三人目にありし男澁面つくりて、物をも云はざりしが、膝立てなほし、「浮世にはかかる難儀もあるものかな、某は身振ふまでもなし。金子一兩持ち合すこそ因果なれ、思ひもよらぬ事に一命を捨つると、思ひ切つて

燗鍋

(二五)面妖の轉訛。不思議なこと。怪しいこと。
(二六)しかめ顏。にがにがしい顏。しぶづら。
(二七)もとは佛教用語で、前世の惡業の應報のことであるが、ここは不運又は不幸。

申せば、一座口を揃へて、「こなたにかぎらず、あさましき身なればとて、小判一兩持つまじきものにもあらず」と申す。「いかにもこの金子の出所は、私持ち來りたる德乘の小柄、唐物屋十左衞門かたへ一兩二歩に昨日賣り候事まぎれはなけれども、折ふしわるし。常々語り合せたるよしみには、生害に及びしあとにて御尋ねあそばし、かばねの恥をせめては賴む、と申しもあへず、革柄に手を掛くる時、「小判はこれにあり」と、丸行燈の陰より投げ出せば、さてはと事を靜め、物には念を入れたるがよいといふ時、內證より內儀聲を立て、「小判は此の方へ參つた」と、重箱の蓋につけて座敷へ出されける。これは宵に山の芋の煮しめ物を入れて出されしが、その湯氣にてとり著きけるか、さもあるべし。これでは小判十一兩になりける。いづれも申されしは、この金子ひたもの數多くなる事。

(二八)おちぶれた身の上だからといつても。

(二九)後藤光基、號は德乘。金工の名人で寬永八年に八十二で歿した。

(三〇)脇差の鞘の外側に挿し添へておく小刀。

(三一)古物・小間物・裝飾品・香料・藥品などを商ふ店。

(三二)折がわるくて、疑を晴らすことができない意。

(三三)常日ごろ親しく交つてゐたゆかり。

(三四)自害をいたした後で。

(三五)死骸の恥を晴らしていただきたい。

(三六)丸い形の框に紙を貼つた行燈。アンドンは唐音。

(三七)勝手向から轉じて妻の居間をいふ。もとは佛敎用語。

(三八)「ひたみち」に同じ。ひたすらに、一向に、ひとすぢに、などの意をあらはす副詞。

(三九)とりしらべ。たづねもとめる。

(四〇)變に具合がわるくなつて。異樣なことになつて。

(四一)お考へ通りになさつて下さい。

(四二)その場でのよい智惠。諺に「分別の分が百貫する」

(四三)ふるまひ。身ごなし。

(四四)(町人とはちがつて)特に立派なものである。

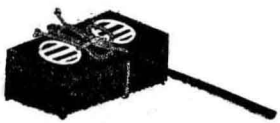
めでたしといふ。亭主申すは、九兩の小判十兩の詮議するに(三九)十一兩になる事、座中金子を持ち合せられ、最前の難儀をすくはんために、御出しありしはうたがひなし。この一兩我が方に納むべきやうなし。御主へ返したしと聞くに、誰返事のしてもなく、一座異なもの(四〇)になりて、夜更け雞も鳴く時なれども、おのおの立ちかねられしに、この上は亭主が所存の通りにあそばされて給はれと願ひしに、とかくあるじの心まかせにと申されければ、かの小判を一升桝に入れて、庭の手水鉢の上に置きて、どなたにても、この金子の主とらせられて御歸り給はれと、御客一人づつ立たしまして、一度一度に戸をさしこめて、七人を七度に出して、その後内助は手燭ともして見るに、誰とも知れず取つて歸りぬ。あるじ卽座の分別、座馴れたる客のしこなし(四三)、かれこれ武士のつきあひ格別ぞか(四四)

し。（西鶴諸國ばなし、卷一）

忍び扇の長歌

西鶴

館住居氣づまりも上野の花に忘れて、諸人の心魂うきたつ春のありさま、衣裳幕のうちには小歌まじりの女中姿、ほんの櫻よりは詠めぞかし。日も暮にちかき折ふし、大名の奥樣めきて、先に長刀、二つ挾箱持たせて、高蒔繪の乘物つづきて、あとより二十あまりの面影、窓の簾のひまより見えけるに、そのうつくしさ和國美人揃へのうちにも見えず、うかうかと附いてまはりける。この男やうやう中小姓ぐらゐの風俗、女のすかぬ男なり。思ふに及ばぬ御方を戀ひそめ、あとより行く中間にたづねしに、



挾箱（金紋先箱）

○（一）武家屋敷の奥まつた生活の窮屈さも。
（二）婦女子の美しい小袖や羽織を集めて綱に通し、或は掛けて幕の代りに張りめぐらしたもの。その内で花見の宴を開くことが流行した。
（三）着替の衣裳や手廻品などをいれて、棒を通して從者に擔はせる箱。身分に應ずる法式があつた。
（四）高く肉を盛りあげた蒔繪を施した婦人用の駕籠。
（五）日本の代表的美人を描いた繪又は繪本。
（六）將軍家や大名の家族の側近に召し使はれ、儀式や他行のときにお供をする少年を小姓といひ、その一組を小姓組といふ。中小姓は小姓組と徒衆（かちしゆう）との中間に位する職で、下級の武士がつとめる。
（七）戀ひ慕つても遂げられぬ。
（八）侍と小者との中間に位する武家の下部。

(九) 是非奉公したいものと運動したところが、よい手引があつて奉公口がきまつた。

○ (一〇) お心にお留めになつて。

(一一) 下級の侍や中間などの住む長屋の窓。

(一二) 若い仲間の者たちが見付けて。

(一三) 扇を投げ入れた下婢。

(一四) 噂しないやうに口留めするために酒を飲ませた。

(一五) 下々の者が書いた文品とは思へない。

(一六) 塀や庭の垣などに設けてある潜り戸。

(一七) 命のある限り、共々に逃げて行かうと。

(一八) 身分の低い者の姿。

さる大名の姪御様と、あらまし様子を語りすてて行く。さてはとその所を知りて、奥方への御奉公をかせぎしに、よき傳ありて相濟み、二とせばかり勤めしうちに、あなたこなたへの御供申せし折ふし、思ひ入りし御乘物に目をつけけるに、縁は不思議なり、「あなたにも何時とも無うおぼしめし入れられ、末々の女に仰せつけられ、長屋の窓より黒骨の扇を投げ入れける。若い者仲間より見つけて、かの半女と心のあるやうに申すを、沙汰無しに酒など買うて口を塞ぎぬ。その夜御扇ひらき見るに、筆のあゆみ只人の文柄にもあらず、おぼしめす事ども長歌にあそばしける。よくよく讀みてみるに、「我を思はば今宵のうちに連れて立ち退くべし。男にさま變へて切戸を忍び命を限り」との御事。このかたじけなさ、身をくだきてもと思ひ定め、その時を待つに、御知らせたがはず、小

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo